10th Ver., June 30th, 2019

救いの御名のほとけさま

【日程】令和元(2019)年 6月29日(土)
【御法座】蒲生下組親鸞聖人讃仰特別布教
【会所】蒲生下組 西福寺,【時間】11時～(45分間)
【出講】本願寺派布教使　堅田 玄宥
滋賀組正覚寺愚住 syohgakuji.web.fc2.com

1st Ver., June 28th, 2015

ご讃題

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 汝一心正念にして直ちに来たれ、我よく汝を護らん

(Ref『散善義』七祖注釈版p467)

南米仏教婦人大会支援

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 皆さん、ようこそおいで戴きました。
- しばらくの間お取り次ぎをさせて戴きます。不肖は、六年前のできごとを忘れることができません。
- その日、私と坊守は初めてブラジルの地に降り立ちました。
- 百年前に移民された日本人の二～五世の皆様が営まれる「南米仏教婦人大会」を支援するためだったのです。

南米仏教婦人大会支援

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- ところが、千人規模の大会と聞いて失敗は許されません。思い余って梯　和上をお訊ねしました。
- 今お話するとすればこんなお話になりそうですがと
- 和上はにこにこしながら「お念仏は難しいものじゃない。これでいい行ってらっしゃい」とおっしゃいました。現地の総長は「是非来て下さい」とおっしゃいました。
- 「**行け**」というお声と「**来たれ**」というお声に安心して私は現地に渡りました。
- 忘れ得ない二河白道のエピソードでした。

花は咲く

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 大会では、皆様よくご存じの東日本復興支援歌『花は咲く』を現地の皆さんと一緒に歌いました。
- まっしろな雪道に　春風香る

わたしは懐かしい　あの街を想い出す
叶えたい夢もあった　変りたい自分もいた
　　いまはただ懐かしい　あの人を想い出す
誰かの歌が-聞こえる　誰かが励ましてる
　　誰かの笑顔-が見える　悲しみの向う側に
花は花は花は咲く　いつか生まれる君に
花は花は花は咲く　私は何を残しただろう

花は咲くの心

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- これは、被災し悲しみにうちひしがれた自分が歌声に励まされ、立ち上がり、
- やがていつか生まれる君に、何を残しただろうと自らに問いかける歌だと窺われます。
- それがそうと分かるのは、まだ見ぬ君がこの世に生を受け、物思う年齢に達したときですね。
- するとこの歌は支えられた人が次代に残すお念仏の姿だとみることができそうです。

花は咲くの心

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- この歌の中に”聞こえる”という言葉がでて来ますね。“聞こえる”、“聞こえて下さる”とは、浄土真宗にとってとても大切な御文でしたよね。
- 只今の私の悲しみの向こうに誰かが私を励ましている、その歌声で私は蘇ったのです。有難いですね。私はひとりぼっちじゃなかったからです。
- “誰か”とは誰か、
- 私は知らなかったのですが、これこそ南無阿弥陀仏の仏さまだったのではないでしょうか

阿弥陀様の切なる願い

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 日本に伝った大乗仏教が本当に花開いたのは、法然上人によってお念仏一つでお浄土に生まれることのできるみ教えが誕生したときでした。
- 親鸞聖人は、その本質は、如来様から賜る信心（本願力回向の行信）一つだとおっしゃったのです。
- 南無阿弥陀仏の“南無”とは“帰命”、“帰せよの命”、“私の願いを聞いておくれ”と
- 阿弥陀如来が、本願のお心から切なる願いで喚び続けていて下さるお喚び声だったのです。

阿弥陀様の切なる願い

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 親鸞聖人のすばらしいところは、如来さまから賜る信心とは、本願招喚の勅命を勅命とお聞かせに与ること、聞くこと、“聞”だと仰せになったことです。
- 信心は、“疑わないという姿”でネガティブ表現ですから信心獲得に至るプロセスが見えませんが、聞くこと（聞こえて下さる）といえば、具体的になります。
- 私達の経験世界で如来さまから賜ったお念仏を仰せの通りに称えれば、聞こえて下さるという“聞名”を実感することができるのです。

白　道・・・一蓮院秀存

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- お東の香月院深励師のお弟子一蓮院秀存1788～1860）師は、
- **声しあらば　あやふからじな　火に水のなかのほそみち　見ゆも見えずも**

とお歌いになりました。

- 「中の細道」とは、如来様の仰せにおまかせてお念仏すれば、直ちに聞こえて下さるお喚び声に喚び覚まされつつ私が歩ませて戴くお浄土に続く白道でしたよね。

白　道･･･六連島のお軽さん

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- しかも信心は唯一度（信一念義）と承って参りましたが、「聞」といえば、それは繰り返し頂戴し喚び覚まされることが分かります。
- 親鸞聖人がなぜ「聞即信」とおっしゃったか。これが一つのお答えです。
- 妙好人の六連島のお軽さんは、
- **昨日聞くのも　今日又聞くも**

  是非にこいとの　お喚び声

とお歌いになりました。有難いですね。

白　道・・・一蓮院秀存

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- さすがに一蓮院秀存師は学僧として、浄土真宗のご法義「信の一念」の煩悶を踏まえて、
- **勅命は　ただ一声と思ひしに**

  今日もくる日も弥陀のよび声」

  とお歌いになりました。
- 「今日も来る日も」というのがいいですね。

ふとあおぎみるおすがたはの誕生

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 今日はそのお心を秋の一日人生の悩みを抱えて当院をお訪ね戴いた真摯な青年のご縁で誕生した仏教讃歌「**ふとあおぎみるおすがたは**」にお訪ねして見ます。
- 青年は、行方も知らず足のむくままに当院をお訪ね下さいました。気がつけば、掲示板の法語に見入っているご自身に気付かれ、そのときお寺のご本尊を拝んでみたいとの思いにかられたとおっしゃいました。
- 「どうぞお入り下さい。」
- すると青年はご本堂のご尊前に額ずき、それは丁寧にご本尊を合掌礼拝されました。

拙速に利益を訊ねる

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- ところが、終って一言、「**どういうご利益がありますか**」とお訊ねになったのです。
- 拙速に利益を求めるのは現代人の姿ですね。
- 「あなたはご存じなかったかもしれませんが、本日、あなたを駅に降り立たしめ、当院に導かしめ、掲示板に見入らしめ、ご本尊を仰ぎたいと思わしめた大きな力が働いていて下さったことでしょう。
- その力に促されるようにあなたが一歩を踏み出された。そこに大きな意義があったのではないでしょうか。

お姿こそが声なんです

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 浄土真宗のご本尊は、その昔、インドの王舎城の韋提希夫人が大きな人生の悩みを抱えてお釈迦様に救いを求められ、
- 救いの法を説こうとお釈迦様がおっしゃったそのとき空中にお立ち遊ばした**住立空中尊**のお姿を象っています。
- そのお姿こそは、お喚び声になって現れ給う阿弥陀如来だったのです。
- それは今日の私達も体験できます。
- それから三ヶ月後に「**ふと仰ぎ見るお姿は**」という讃歌になって現れて下さったのです。

ふとあおぎみるおすがたは

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 一、ふと仰ぎみるおすがたは
  すくいの御名（みな）のほとけさま
  されば六字と名告（なの）らして
  となえてご覧と勧めます
- 二、・・・・・・・（初めの二行は一番に同じ）
  されば私に称えさせ
  耳に聞こえてよ喚（よ）び給う
- 三、・・・・・・・（　　〃　　一番に同じ）
  さればかさねてきかしめて
  われをたのめとよびさます　　なもあみだんぶ

大 行

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- ◆如来様は、苦悩する私を救わんが為に、
- お手許で如来様のお浄土に生まれていく（今生では摂取不捨のお心に包まれる）仏様の行をお手建て下さって、お与え下さり、
- 「**さあ、称えてご覧**」とお勧め下さいます（Ref発願廻向釈）。
- ◆そのようにご案内戴いたのですから

  「**さようでございますか**」とお念仏致しましょう。

聞 名→信 心

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 称えれば、直ちに南無阿弥陀仏と聞こえて下さいます。
- そのとき聞こえて下さった南無阿弥陀仏こそが、「**汝一心正念にして直ちに来たれ、我よく汝を護らん（ワレニマカセヨ）**」との阿弥陀さまのお喚び声だったのです（二河白道）。
- このとき深いお心はわからずとも「**さようでございますか**」「**さようか**」と頭を垂れることが如来様から賜る信心だったのです。

大　行→聞　名

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- なる程、お勧めの儘に称えれば、直ちに私の上に如来様の行（大行）が働き出して下さり、南無阿弥陀仏のお声が届いて下さるのです。
- 如来様のお心におまかせして称えたのですから、聞こえて下さったものこそは、私の声であって私の声ではない。
- 如来様そのお方のお喚び声だったと頂戴できるのでした。
- それでは皆様ご一緒にお念珠に手を通してお念仏を申すことに致しましょう。

ここで一息いれましょう。

(ここから先は配布資料なしでやりましょう)

原因系では、称名正定業

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- **信心正因　称名報恩**のキャッチコピーには、どうすれば信心獲得できるかが示されていません。
- それどころか、それを問うことさえ「自力のはからいじゃ」と無慈悲に切り捨てられてきたのでした。
- 節談説教の「山伏弁円」に出てきます。
- 「**信心正因　称名報恩**」という御言葉は、現実社会でもお目にかかる「報恩」でさえ、その現実が未経験なら理解不能です。
- 信心は、浄土往生のための正因であり、お念仏は、信心獲得出来たことに対する報恩感謝となる、という道行きは、浄土往生が感心の外にある限り全く受け付けません。

原因系では、称名正定業

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- これでは、青年の問を拙速だと一笑に付すことはできません。
- 称名も原因系のエネルギッシュな御言葉を選び直して表現できなければなりません。
- してみれば、**信心生因　称名正定業**が最もオーソドックスだったのはありませんか。
- ところが、信楽峻麿先生が主張なさった「**信心正因　称名正定業**」は、当時の〇〇寮が政治力で必至になって否定されたと聞かされます。
- ここに宗門の大きな課題がありますね。

称名讃仰

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 称名を衆生にも許される行いの次元で捉え直せば、「**信心正因　称名讃仰**」となるでしょうね。
- 諸仏如来ならばこそ、お名号の素晴らしさが分りますからこれを讃嘆なさる。
- それをお聞かせに与って衆生は「何と尊いことよのう、まことまこと」と讃仰させて戴くのです。
- 第十七願のお心です。
- 讃阿弥陀仏偈和讃第三十首に曇鸞大師のお徳をお称え下さったご和讃があります。
- **阿弥陀仏の御名を聞き　　歓喜讃仰せしむれば、**

  功徳の宝を具足して　　一念大利無上なり。

称名聞名

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 信心獲得のプロセスアプローチ表現では「**信心正因　称名聞名**」となるでしょうね。
- 私達はすぐには信心獲得できない。
- けれども、お喚び声ならば、聞いて聞いて聞き抜く間には、終に如来様のお喚び声だと目覚めることができる。
- 聞こえる、聞こえて下さるのは、私の行の次元を超えていたからです。
- 瓜生津隆眞先生は、妙好人木下マサさんの語録をひとつひとつひもとき、マサさんには、聞いて聞いて聞き抜いてゆかれた厳しいお聴聞があったとおっしゃいました。

称名聞名

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 親鸞聖人は「**聞即信**」と仰せ下さった。
- 何ゆゑ「**聞即信**」と仰せ下さったか。
- 成就文に別の御言葉として現れる「聞」と「信」とを何ゆゑ一体のものとして採り上げる必要があったのか。
- 却って、正依の大経第十七願、第十八願文には「聞」自体がなかったからか。
- 困難な課題ですが、不肖は、妙好人お軽さんのお歌、一蓮院秀存師のお歌から、次のように頂戴するようになりました。

称名聞名

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 「信」は姿だからただ一たび、「聞」はプラクティスだから繰り返しを許す。その性格は矛盾概念でありながら、「聞即信」で結べば、**“静なるままにプラクティカルな動の真理を招来したものとなる”**からではないか。
- お喚び声の主は如来様、衆生はそれをお聞かせに与り、終に喚び覚まされるからです。

ふと仰ぎ見るお姿は一聞見一致ー

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- ただ一度であろうとも丁寧に合掌礼拝し、どんなご利益がありますかと問うた青年の真摯な姿にうそいつわりはありません。
- 何とかしてこのお応えが見つかって欲しい、問に対するお答えを探し求めて三ヶ月が過ぎ去った頃、とうとう「**ふと仰ぎ見るお姿は**」という讃歌になって現れ出て下さいました。
- まったく「ふと」のありさまそのままに

ふと仰ぎ見るお姿は一聞見一致ー

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 一、ふと仰ぎみるおすがたは
  すくいの御名（みな）のほとけさま
  されば六字と名告（なの）らして
  となえてご覧と勧めます
- 二、・・・・・・・（初めの二行は一番に同じ）
  されば私に称えさせ
  耳に聞こえてよ喚（よ）び給う
- 三、・・・・・・・（　　〃　　一番に同じ）
  さればかさねてきかしめて
  われをたのめとよびさます　なもあみだんぶ

聲の字義

Ref) ◆りびんぐらいぶず_R元年7月第1号_◆新縦型_救いの御名のほとけさま_Ver.7_190624

- 声と耳は切っても切り離せません。
- 声の旧字体は「聲」です。
- 殳は、字画の「となえ」と云われます (漢和辞典)
- そうすると、聲というのは、声に出して、口に称え、その耳に聞かしめずばおくまいと読むことができるではありませんか。
- 本願力回向のお念仏を、声に出して称えせしめ、その耳に聞かしめずばおくまい、これが如来さまのお心だったのではありませんか。合掌。

完